Eureka XII

六年制通信 No.30 令和6年12月6日(金)号

自制心

独りを慎みなさい、これも何度か君たちに伝えてきました。中尊寺貫主であり作家の今東光がよく言っていましたから仏典か漢籍にある言葉なのでしょう。人前と一人でのときの振る舞いは多くの場合違うものです。友だちといえる時は廊下に落ちているゴミを拾っても、一人の時は無視してしまうかもしれません。多くの人の目のある時はごみを捨てることはなくても、誰も見ていないと捨ててしまうかもしれません。人の目が自分の行動を律してくれていることは、日常生活を点検すれば誰でも自覚できると思いますが、これも人間の弱さだと私は思います。独りの時の自分を律するのは難しいですからね。一人の時でも人前にいるかのように自分を律して行動しなさいというのが、「独りを慎む」ということです。孤独な時間を持つように言うのも、一人にいるときに自分と対話してほしいからです。きっと本当の自分の声が聞こえてきます。誰に遠慮もいらぬ素のままの状態ですらられるわけですから、本来君が併せ持っている強いところも弱いところも美しい心も醜い心も、見つめてみることです。

さて、ちょっとしつこく浦島太郎に戻ってみますが、ああいう「見たらダメ」の物語はほとんどの場合、ダメと言われる方は一人なのですね。浦島もたった一人の物語です。友だちと竜宮城に行ったものではありません。浦島太郎が帰ってみると、自分の知っていた世間が一変していたわけです。知人が誰一人いないのですから、違う世界に来たのかと思ったことでしょう。その謎を解くカギは玉手箱しかない、そう考えるのはいたって合理的です。開けないでという乙姫の言葉は、おそらく二度と会うことはない人だけに重い戒めにはならないですよ、普通に考えて。しかし、これ、集団だとうろかなのでしょうか。例えば君のクラス全員が浦島太郎の立場だったらと考えてみて下さい。開けますか？玉手箱。少なくとも開ける派開けない派ができるでしょうね、きっと。で、議論が始まることでしょう。考えると面白くないですか。

アダムとイブも、蛇はイブ一人を唆して林檎を食べさせますが、アダムとイブの二人が一緒にいるときに蛇がやってきて同じことを言ったら二人はどうしたでしょう。アダムはイブをとめることができたでしょうか。私はイブがリンゴをとって、なんだかんだと理由をつけて、まずアダムに食べさせるのではないかと思いますが女子のみなさん、いかがでしょう。ま、結論は変わらず二人ともエデンの園から追放ですな。

要するに人間は意志が弱い、だから自制心を保つのに苦勞するということ。自制心の実験というわけではないのですが、有名な「マシュマロ実験」には興味深い側面が示されています。この実験は、前にも紹介したから皆さんも知っているでしょう

が、子どもにマシュマロを一個与え、20分ほど一人にします。その際、もしマシュマロを食べないで我慢していれば20分後もう一つやると言っておきます。子どもは今一個食べるか、20分後に二個手に入れるかの選択を迫られるわけです。目の前の一の利益か将来の二の利益か、どちらを選ぶかという実験です。すると当然、我慢して食べないでいる子と我慢できずに食べてしまう子がいますよね。それで我慢できた子、つまり自制心の強い子は大人になってもその自制心は失われず、いわゆる優秀な人間になる確率が高いというのですね。これが実験から得られることとされていますが、こういう心理実験は時代が進むと結論が変わったりしますから、現時点で同じことが言えるのかどうか、専門家に聞いてみたいところです。私が興味深いと言ったのは、実験から得られる結論ではなくて自制心の強い子の振る舞いの方でした。食べずに我慢した子と我慢できずに食べた子の行動の違いが面白かったのです。

一度でもマシュマロに触れてしまった子は食べてしまう確率が増え、自分の視界にマシュマロを入れたまま我慢しようとしても失敗するものらしい。我慢できた子はたいていマシュマロを意識の外へ出そうとするのでしょうか、なるべく見ないように背を向けたりしていたそうです。このあたり、私には大変面白く感じます。自制心のある子は実は人間の心理をよく知っている子なのではないかと思うわけです。正しい工夫のできる子が自制心を強く保てるのではないのでしょうか。

今週のおすすめ

・有川 浩 『レインツリーの国』 (角川文庫)

この著者、男性かと持っていました。「浩」は「ひろし」ではなく「ひろ」で女性なんですね。この著者の作品、結構読んでいます。『阪急電車』は前に紹介しましたね。『県庁おもてなし課』、『三匹のおっさん』、『図書館戦争』も面白かった。『レインツリーの国』は映画になっていますね。これはまだ観ていません。

ある本の感想をブログで読んだことがきっかけで知り合った若い男女の恋愛物語です。昔ならきっと文通ですよ。君たち、知らないですよ、文通なんて。ある本というのが『フェアリーゲーム』というタイトルなのですが、こちらは架空の本のようです。感想を言い合ううちに当然のように二人は惹かれあい、これまた当然のように会って話したくなるわけですね。ところが実際に会ってみると、男は女の行動が文章を通して勝手に想像していたものとは何か違うと思ってしまう。その違和感の正体は女が最も知られたくないと思っている障害に由来するものでした。君はその障害ゆえに面倒くさい女になってしまっている、そう指摘する主人公が勇氣ある若者に思えます。昔、「愛していると言ってくれ」というドラマが大ヒットしましたが、あの中に出てくるいくつかのシーンを思い出してしまいました。この障害が最も孤独を感じるというのを、私はあのドラマで教えられました。ちなみにこの障害は、いくつかの程度というか、段階というか種類というか、細かく分かれていて、とにかく全部まとめて一つの同じ症状だとは言えないということをこの本で知りました。

BGMは 山下達郎 の 街物語 でした…。